

ロゴマーク デザイン学部メディアデザインコース3年 木村 尚史

# 特集 海外見聞録

人生を変えた都市、New York  
札幌市立大学附属図書館長 武邑 光裕

コンビニエントなアメリカの大学図書館  
札幌市立大学看護学部 星 美和子

オランダ (Nasal land) の母子保健事情  
札幌市立大学看護学部 高室 典子

海外出産体験記(スリランカ編)  
札幌市立大学看護学部 大野 夏代

ブックショップ・トラベラーのすすめ  
札幌市立大学デザイン学部 山田 良

Gwangju Biennale 2008  
札幌市立大学デザイン学部 Maroan el Sani

路行千里、読書万卷  
札幌市立大学デザイン学部 張 浦華

電子情報活用編 一文献検索におけるインターネット情報と学術文献データベースの違い—  
図書館顧問 田中 道子

カウンターの内側から・外側から

附属図書館貸出ランキング

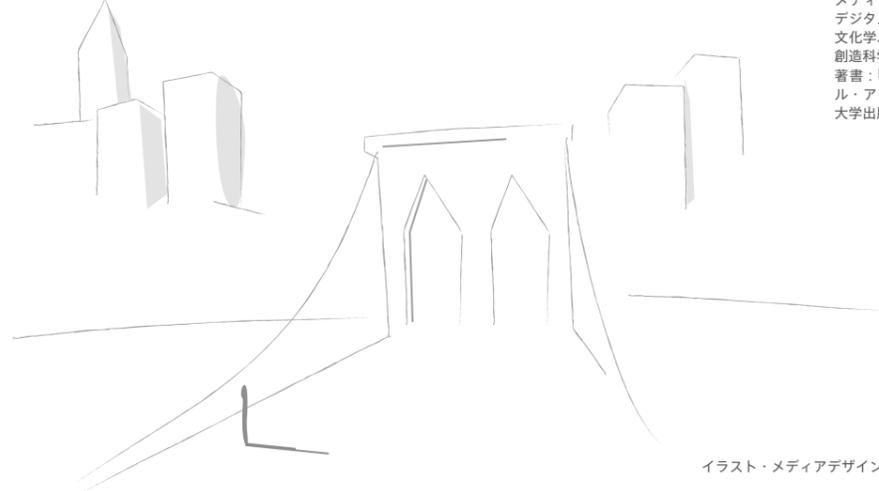
図書館情報

札幌市立大学  
附属図書館  
SAPPORO CITY UNIVERSITY



<http://www.lib.scu.ac.jp/>

# 人生を変えた都市、 New York



札幌市立大学附属図書館長  
武邑 光裕

筆者紹介  
メディア美学、メディア環境学、  
デジタルアーカイブ情報学、情報  
文化学、創造産業論、コンテンツ  
創造科学  
著書：「記憶のゆくたてーデジ  
タル・アーカイブの文化経済」東京  
大学出版会 2003ほか

イラスト・メディアデザインコース3年 山本 真理子

大学卒業後、私は附属研究所に2年間在籍し、企業への「就職」を通り越し、ドイツ表現主義や抽象表現主義がどのようにして起ったのか調べるため、大学の図書館や国会図書館に通う日々を送っていました。大学のティーチングアシスタントから副手、助手へと、大学という研究の場に身を置き始めた最初の時期でした。

当時の恩師は慶応大学を退官されたばかりの「美学」の研究者で、鎌倉のお宅に毎週伺い、美学の講義を受けるのが最大の関心事でした。恩師から欧州留学を薦められ、ドイツ行きを真剣に考えていた私には、もうひとつ大きな文化的関心がありました。それはニューヨーク(NY)という都市の魅力でした。ドイツに行く前にニューヨークに行きたい。

そう考えた私は親を説得し、何とかチケット代だけを援助してもらうことに成功します。当時1ドルは200円弱、急速な円高とはいえ、パンナム(パンアメリカン航空)の格安チケットはかなり高額でした。開港したばかりの成田から、ひとりNYに飛び立ったのは、1979年夏のことでした。NYは当時の私にとって、先端文化の坩堝のような場所でした。そこは過去の芸術や美学がひっそりと眠る場所ではなく、今その瞬間に新たな文化の台頭を予感させる場所でした。

過去のドイツ表現主義ではなく、後に

80年代前半の現代美術界を席卷することになる新表現主義やグラフィティアートなど、20世紀後半の現代美術の革命が体感されたNYは、ビデオアートやデジタルアート、その舞台となったケーブルテレビやコンピュータをめぐるニューメディアの壮大な実験場でもありました。まともなガイドブックすらなかった時代、夕暮れのブルックリン・ブリッジから摩天楼を見上げ、マンハッタンに向かう車から見た最初の風景が、私とNYとの関わりを決定づけました。マンハッタン島を隈無く歩く興奮がその後続きます。

約1ヶ月に及ぶアメリカひとり旅は、結局NY滞在にほとんどが費やされ、日本に戻った私の中で、ドイツ留学への思いは急速に薄らぎ、NYへの思いだけが日々募っていきました。今思えば、人生の大きな選択の時でした。奨学金まで用意されたドイツ留学をお断りした時、恩師は一言、「新たな興味から研究は深まります」と言ってくれました。

1981年、NYの「メディアアライアンス」という研究機関にお世話になり、「メディア美学」という研究テーマに出会います。電子メディアやデジタルメディアを美学の研究対象とする新たな分野でした。後にCGやデジタル映像が花開く前夜のことです。1979年以降、短期、長期を含め、私はNYに50回以上足を運ぶことになります。

過去の文化の参照に端を発し、現代に連なる芸術やデザインの衝動と直接向かい合った青春時代の思い出は、今となっても鮮烈な風景やその街の臭いの記憶と共に刻まれています。振り返れば、図書館で過去の知識との出会い、そこから実際の世界に旅する道のりだったように思えます。

NYに始まり、世界中を旅した私の経験は、常に日本という国を新たに発見する旅だったと言えます。NYを起点に、私はメディア(媒体)となって世界を経験する旅を知りました。世界中の人々と出会い、心揺り動かされる都市と遭遇し、その街を徹底して歩くこと。世界との距離を身体で感じる旅こそ、メディアとなってあらゆる情報と交感できる自分の可能性を知る重要な機会です。

過去の旅はフットワークから現実の「ネットワーク」に広がりました。今の旅は、インターネットというメディアにフットワークが加わることで、新しいネットワークのあり方が生まれているのだと思います。要は「ネット」はネットワークではないのです。ありふれた助言ですが、若い時こそ、海外への旅をして下さい。

NYに関する推薦図書  
ニューヨークの古本屋 常盤 新平 白水社

メディア美学に関する推薦図書  
Sight, Sound, Motion: Applied Media Aesthetics  
Herbert Zettl  
Wadsworth Publishing

アメリカの大学生は、“卒業するまでに積み上げると自分の身長2倍になるくらいの本を読む”、ということを知ることがありますか?!

多少誇張された表現かもしれませんが、実際、私も留学中は本当にたくさんの文献を読みました。大学での授業はレポートやテストに加えて、とにかく宿題のReadingが多いのです。留学生はやはり英語のハンディがありますし、ひとつでも不可を取ってしまうとその後の留学生生活を続けられなくなるので、皆とてもよく勉強します。それにアメリカの大学では、成績が良ければ授業料が自動的に免除になったり、賞がもらえたりと大きなメリットがあるので良い成績を取るために皆が切磋琢磨し一生懸命です。

ハードな大学での勉強を支えてくれるのは、やはり図書館です。アメリカの大学にはキャンパス内に大小様々な図書館がありますが、中でも私がよく利用したのは「ヘルスサイエンスライブラリー」でした。アリゾナ大学(University of Arizona)にはアリゾナヘルスサイエンスセンターと呼ばれる、医学部・看護学部・薬学部・公衆衛生学部などの健康科学に関する学部と大学病院(University Medical Center)及びその他のクリニック・研究所が多々集

まって構成されている、ひとつのコミュニティがあります。そこには世界的に有名な大学教授が揃っているのですが、ヘルスサイエンスセンターの中心にあるのが、健康科学関係の書籍を所蔵するヘルスサイエンスライブラリーなのです。

さてこの図書館、大学内の他の図書館と違い、なんと24時間開館(!)、しかもほぼ年中無休でした。閉館するのは、年間で感謝祭(11月の第4木曜日)とクリスマス(12月25日)の2日だけ。日本でも、カードキー等で利用者が閉館後も24時間自由に入館できる大学図書館はありますが、こちらは本当の意味で“開館”しています。つまり閉館しないのです。本の貸し出しや文献検索に関する司書さんの業務は22時頃で終了しますが、自分で文献を検索し閲覧や勉強をするためなら、いつ来ても、いつまでいてもかまわないのです。

私はアメリカでよく“Night owl”と呼ばれる夜型人間の典型なので、夕食を終えて勉強に出かけていくことが多かったのですが、その一方で、“Early bird”と呼ばれる朝方人間の私の友人は、朝の5時から出かけて行って勉強したりしていました。

24時間開館の図書館ですから、夜間の利用者の安全には特に配慮がされてい

ます。例えば、22時半になると、大きな麻栗犬(?)を引き連れた体格の良い警察官が巡回に来ます。このおまわりさん、図書館にいる一人一人について、大学の学生証・教員証、もしくはUniversity Medical Centerの職員証の提示を求めます。いずれも持参していない人は、ここで退出しなければなりません。それから、普段はいくつかある入り口も21時以降は病院側の一つだけになります。また、アメリカの大学のキャンパスは広いので、図書館を出て数百メートル先にある駐車場の自分の車へ行くまで、警備員さんにエスコートをお願いすることもできます。学生も教員も、そして病院に勤める医師、看護師、薬剤師など、だれもが自分のペースで、いつでも図書館に寄って安全に学習ができるよう、環境が整えられているのです。

電子化によって、自宅にいながらも必要な文献を得ることを可能にするともに、実際に図書館に来館する利用者にも、便利で幅の広いサービスを提供するアメリカの大学の図書館。世界をリードする研究や研究者を次々と輩出する裏には、図書館を学習・研究の拠点と位置づけ、年間何億という投資をする大学があつてのことなのでしょう。

札幌市立大学看護学部  
星 美和子



筆者紹介  
看護管理領域担当。臨床に於ける  
看護師の現任教育に携わった後、  
アメリカに渡り大学・大学院卒業。  
看護学博士。Vulnerableな対象の  
ウェルビーイングについての研究。

# コンビニエントな アメリカの 大学図書館

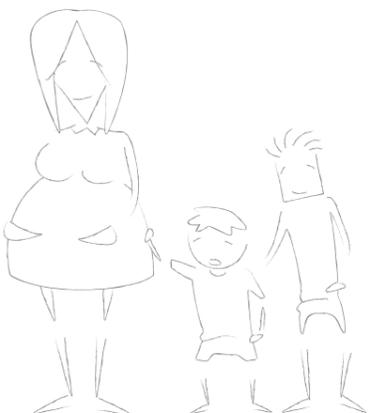
イラスト・メディアデザインコース3年 畑山 愛実

痛が始まったら入院することになりました。陣痛が5分間隔になったら入院するように、との医師の指示でしたが、一人目の分娩所要時間が5時間であった私は、陣痛を3回くらい確認したところでタクシーを呼び、病院に向かいました。最後まで浮腫みと悪阻が苦しかったのですが、その日はそれらが少し軽減していたため陣痛発来の予感がしており、朝から出産を迎える喜び（つまり悪阻が終わる喜び）でわくわくしていました。

病院に到着して、夜間受付で入院費用を前払いするうちに歩けなくなり、車椅子で分娩室に運んでもらいました。1人目の出産の時と同様、分娩室へ直行です。主治医は、他の病院で出産介助中。医者への到着までイキムな、と当直医に言われましたが、とてもそんな余裕はありません。「マダムは間に合わないね」と、当直医が手袋をしクーパーを持った途端に、主治医が到着。予定通り、長女は、希望した先生に取り上げてもらいました。

2人目の出産が帝王切開術でしたので、この時の出産は、いわゆるハイリスクでしたが、多くの方に助けられ、このように申し分のない安産でした。朝、お兄ちゃん達が赤ちゃんに会いに来ました。長い間末っ子だった2番目の子が「お兄ちゃん」となったことが、まぶしく感じられました。

さて、その2番目の出産は、パキスタンでした。「はっちゃんはパキスタン生まれ：助産婦さんの海外出産体験記」（ぶなのもり：著者・大野夏代）は、桑園キャンパスにあります。前置胎盤で命がけの帝王切開でした。是非読んでみてください。



筆者紹介  
基礎看護学領域担当。JICAで5年間の海外勤務の経験。地球規模で健康を考える看護師の育成に尽力。助産師でもある。

5年にわたる在外生活の中でも、長女の出産は最大のイベントの一つでした。今回は、その経験を書きます。

外国人としてその国の医療サービスを受けようとするとき、まず、問題になるのはシステムの違いです。スリランカの国立病院では、外国人を含む誰もが無料の医療を受けることができます。国民の国立病院に対する信頼は厚いものがあり、スリランカの国立病院は、国民の健康を守るために大きな役割を果たしています。

しかし、国立の医療サービスは、残念ながら量的な不足があり、社会経済的な要因がそれらをさらに使いにくくしています。というのは、例えば、レントゲン検査の設備が少ないために、たかだかレントゲン検査のために、何時間も何日も待つこととなります。交通機関が不便なので、レントゲンや心電図検査のためだけに入院する人もいて、入院施設も混雑をします。出産の場合も、外診で陣発が近いことを診断し入院になることが多く、産後は翌日の退院ですのに、出産前の入院期間は2-3日になることが普通です。これは、夜間の移動手段が少ないことに関係していると思われます。

医療費を支払うことのできる人は、そういう混雑した無料の医療サービスを避け、民間の施設（私立病院）のサービスを利用します。コロンボでは、100床程度の私立病院が何軒もあり24時間で診療をしていました。

これらの私立病院は、イギリスのオープンシステムを採用しています。すなわち、まず主治医を決めます。そして、その医師が何曜日にどの病院で働いているかを聞き、それにあわせて外来を受診します。出産の場合は、各病院の病室の混み具合を聞きながら、医師を通して出産の予約をします。

外来受診料は、医師の格によって異なります。私は、外国人の出産に慣れている女性の医師に出産を診てもらうことにしました。妊婦検診が1回300ルピー（600円程度）という、ちょっと偉い先生です。

このときは、私の3人目の出産でした。私立病院では、入院期間が長くなると当然費用がかかるので、私の場合は、陣

イラスト・メディアデザインコース3年 山本 真理子

オランダは、ヨーロッパの北部に位置し、東はドイツ、南はベルギー、西は海をへだててイギリスに向き合い、国土としては、九州の大きさに相当する国です。あまり知られてはいませんが、すべて干拓によって海や川を埋め立てて人工的に作られた土地でもあり、最高海拔320mで国土の1/6は海拔0m以下であることがそのことを物語っています。街は、水害を防ぎ、水力を利用するため、アムステルダム市内はもとより、全国的に運河網が引かれて、首都アムステルダムから5分も経たぬうちに、目に入るのはあたり一面の田園風景です。

オランダは、先進国と言われる国の中では、唯一自宅出産が盛んな国で、ヨーロッパの中でもユニークな存在です。妊娠や出産は病気ではなく、生理的な体の動きだから、できるだけ自然に任せて医療の介入は最小限にしたほうがよいというのが一般的な考え方です。出産のプロセスに不要な医療処置を用いず、人間は本来自然で安全なお産が可能であるという点で、世界保健機構（WHO）でも高く評価しています。

オランダ全体が、人工的とはいっても自然をとて大事にした国柄だからかも知れません。

オランダはわずかな土地に1550万人が生活しているため、人口密度は日本の1.4倍に達していますが、こののどかな風景からは、人口密度の高い国という印象はなく、そこに訪れる人の気持ちまでも癒してくれる不思議な趣があります。

昨年に、オランダで自宅出産を扱う助産師に同行し、女性や乳幼児のヘルスケアと接する機会を得られたので紹介します。

オランダでは、ホームドクター制度が徹底しており、小児も成人も一次医療は、すべて地域のコミュニティにいるホームドクターが担当しています。病院は高度の医療のみを扱うため、ホームドクターの紹介がなければ利用できません。乳児死亡率は世界で最も低い国でもあるくらい、母子保健や小児へのヘルスケアが充実しています。そのことはオランダ人の

平均身長が世界で最高といわれ、2000年の統計では男性1.84m、女性で1.71mであることから、子どもの病気が多くないことや栄養状態が良いことが推測されます。子どもだけにとどまらず住民へのヘルスケアは、予防的ヘルスケアと医療的ヘルスケアの2本の柱に分かれます。

出産は、自宅出産でも施設出産でも出産後1週間以内には、ホームドクターか地区の保健師・看護師が訪問し、母子の健康チェックや保健相談が行われます。

特に小児は、胎児の時から検診システムが充実し、生まれてからはWell Baby Clinicといわれる保健所なところが、予防的ヘルスケアとして、生後1歳になるまでは月1回、以後は年1回ペースで健康診査が行われるシステムがあります。子どもが生まれると日本の母子手帳に相当するような「成長ノート」が発行され、成長を記入していくものでありますが、子育てに関する情報は育児書以上に子どもの成長に合わせたポイントで細かく丁寧に記載されています。

また、働く女性にとって羨ましいことは、男性の育児休暇取得率が高いことです。オランダは、国策として女性の就労を進めているため、父親、母親どちらが半年くらいの育児休暇をとってもその間、給与が出ることも男性の育児休暇取得を多くしている理由です。そのほか医療や保健面のサポートとは別に、子育てアシスタントを家庭に派遣して子育てをサポートする制度もあり産後の母親の世話や、上の子の世話も含めた生活協力や支援で、対象となる家庭の約8割が利用しています。

オランダは、諸外国と比較しても子育てをするにはよい環境といわれます。ただ、住みやすいため、移民が年を追って増加傾向にあり、私が同行した母子保健相談においても価値観や様々な生活背景を確認しながらでした。離乳食ひとつの相談にしても、大人と同じ食事の推奨が、宗教や生活習慣の違いで、異なる指導になることもあり、多民族国家における母子保健事情の難しさもオランダにはあることを感じました。

オランダに関する推薦図書

21世紀の保育モデル—オランダ・北欧幼児教育に学ぶ：島田教明、辻井正（編集）  
 残業ゼロ授業料ゼロで豊かな国オランダ：リヒテルズ直子著、光文社  
 オランダの教育—多様性が一人ひとりの子どもを育てる：リヒテルズ直子、平凡社  
 オランダを知るための60章：長坂寿久著、明石書店  
 オランダ 寛容の国の改革と模索：大田和敬著、見原礼子著、寺子屋新書  
 オランダ史：モーリス・プロール著、西村六郎訳、白水社  
 オランダ大好き！：松崎八千代、JTB

筆者紹介  
母性看護学領域担当。助産院の開院経験あり。子育ての支援に尽力。母乳育児支援やベビーマッサージについての研究。

イラスト・メディアデザインコース3年 畑山 愛実

# ブックショップ・トラベラーのすすめ

札幌市立大学デザイン学部 山田 良

## 表紙探索

ヨーロッパにいくと、僕はよく本屋さんへ伺います。前もって大きな書店を調べておく場合も



Danish Design Center, Bookshop / 買い物の前にここに立ち寄り、どのようなデザインのものにするか考える人がいるそうです

ありますが、たまたま通りかかった書店に入り結局一時間以上もくもくと本の表紙を眺め歩くという場合もあります。また旅行中は普通の生活にくらべ何倍も歩きますから、実は休みたい入店してしまうことも多いです。もちろん外国語の本たちですのて読むことは簡単ではありません(不可能を含む)。ここでは僕の目的は「表紙の探索」です。新刊書やよく売れる本、話題の人や事物をとりあげた本が広い台の上にたくさん置いてあるのをよく見かけると思いますが、一般的にこれを「平積み」といいます。外国でもこの平積み方法は同じなのですが、これらの表紙を眺め歩いているとその地域の最新の話題や流行、地元住民が気にしていることなどがなんとなく想像できてくるんです。それに加えヨーロッパでは地域によって書店の雰囲気は様々です。日本でも東京の神田など一部の地域では、「書店ごとのキャラ」が残っていますが、外国では店主によるこだわりや作戦をより強く感じることができると思っています。そんな雰囲気を何度か同じ地域内で楽しんでいると、観光名所の中だけでは意識することのない、まちの話題や人々の興味が浮かんできます。



Bookshop, Reykjavik Iceland / アイスランドの書店。奥にはカフェが併設されリビングルームのようです

## ずっしりとして手軽です

インターネットを使って情報を瞬時に得ていることは世界共通ですしヨーロッパの学生も同じです。ただ僕のみてきた北欧の

写真・山田 良

学生らは「本は、ほしい情報の核心へ早く近づける」と言っている人が多かったのも憶えています。また重さがありますので手の感触と情報量が体感でき「むしろ手軽です」と言っている学生もいました。

1996年パリ郊外に完成した「新フランス国立図書館」は、当時より今に至るまであたらしい図書館デザインとして話題になっています。ここではそれまでの建築デザインのセオリーだった「書庫を地下空間に閉ざす」ことをせず、地上階にみえるガラスのタワーに蔵書をならべ木製書棚で覆うという「蔵書の質を建築デザインそのものにしてしまおう」と試みられています。コンペ(設計競技)で選ばれたこのアイデアはまさに「本」そのものを見直そうという思想の現れであり、建物完成後もフランスの人々に注目され共感される施設となっています。



フランス国立図書館 (1996) 設計: ドメニコ・ペロー / ガラスタワーの内部に無数の木製書棚がみえます

## 「海外」としての外国と、「外国」としての海外

今年の春、北欧の島国アイスランドを訪れました。国土は北海道より少し広い程度の面積で、約30万人の国民(ちなみに我が南区人口は約15万人)が住む日本に比べると小さな国です。国内で唯一空間デザインの学べる「アイスランド芸術大学」を訪問する機会がありました。約300人の学生が在籍し、デザイン・ファインアート・音楽・演劇と芸術分野に関わる学科からなり小規模ながら活気のある大学です。

話はちょっと変わりますがヨーロッパでは建築のデザイン事務所にて仕事をする場合一般的に大学院卒と同じ意味の「Master Degree」をもとめられます(日本やアメリカの大学システムと異なる)。訪れたアイスランド芸術大学には大学院がありませんので、空間デザインを学ぶコースの殆どが卒業後は海を渡りドイツやイギリス、北欧の大学院に進学することになります。そう、就職に必要な

筆者紹介  
2007年より札幌市立大学空間デザインコース講師。2003-05年文化庁派遣芸術家研修員としてノルウェーにて建築デザイン活動。建築・アート・ランドスケープの範囲を限定せず活動中。大学ゼミにて地域のパブリックスペースを手がける。

であるため進学する、のですが「進学＝外国留学」におのずかになってしまうのです。

同じ島国の日本では、外国の大学へいくことを海外留学と表現すると思います。僕はこの「海外」という響きがわりと好きで、なんだか冒険のような、異なる文化に勇気をもって飛び込むような気持ちになる人は多いのではないかと思います。しかしながらアイスランドの学生にとっては海外の大学へいくことは自明のことで、はじめから「外国」へ進学することがあたりまえ、として自国で学んでいるのです。



Iceland Academy of the Arts, Library / 世界のデザイン雑誌が集められています。よく見ると日本のものも...

## ブックカバー・スクロール

表紙の話題に戻ります。ヨーロッパでは表紙のデザインをみているだけでその多様さから学ぶこともできます。建築やプロダクトの大きめな写真集などはタイトルの文字や大きさ、写真を交えたグラフィックデザインなど一冊ずつがポスターのようにデザインされています。アイスランドの大学図書館では、さきにも触れましたとおり外国と国内の書籍が区別なく一度に並べられていました。僕にとっては世界のデザイン雑誌コーナーなのが、彼らには普通の雑誌棚ということに気づいてちょっと印象的でした。

訪れたまちの書店では地元の人々の興味を想像し、大学では国や言語を意識せず図書を開覧する。自分の足で本の表紙を「スクロール」しながら眺めることは、なんだか頭の中で無声映画をつくっているような優しい魅力があるのかな、と思っています。



Danish Architecture Center / デンマークにある空間デザインに関する書籍専門店です。眺めているだけで建築家やデザイナーの名前を学べます。

筆者紹介  
Associate Professor, Sapporo City University  
Collaboration with Nina Fischer as an artist duo.  
more info: <http://www.fischerelsani.net>

This year we were invited by the curator Okwui Enwezor to participate at the 7th Gwangju Biennale. This international art festival was established 1995 as the first art biennale in Asia. We went there beginning of september for one week to install our latest work "Spelling Dystopia" a 2 channel video installation, which we realised this year in Sapporo and Hashima Island near Nagasaki.

Spelling Dystopia takes as its subject Hashima, an island off the coast of Japan with a fascinating history. Entirely manmade, the concrete island served as a coal-mining operation that, at its peak of operation, housed some 5000 inhabitants, at that time the most densely populated place on earth. Abandoned in 1974, when its mineral resources had been exhausted, the island has since taken on a ghostly, mythic status in the national imagination, aided by its appearance in a Battle Royale II, a recent Japanese adventure/science fiction film. With this work we wanted to explore the changing roles of the island throughout its history, capturing the accounts not only of former inhabitants but also the current impressions of high school students of a place they know only indirectly through representations. As with many of our previous projects, Spelling Dystopia asks how memory operates, how a site wears its history, both physically and metaphorically.

The challenge of establishing a major international biennial exhibition in Gwangju coincided with the rising impact of globalization at the end of the 20th century and the prosperity that has profoundly redefined Asia's economic and political role at a global level. Propelled by technology, modernization, and the rapidly expanding role of economic and cultural networks in the global system, the so-called Asian economic miracle has profoundly shaped the growth of cultural and artistic perspectives. Economic liberalization and cultural expansion have provided a horizon of new possibilities for reflection within emerging technological, political, social, and knowledge spheres. In South Korea this new horizon first became visible through a committed and paradigmatic political transformation, a shift underscored by the bold, courageous democracy movement, which erupted on the streets of the city of Gwangju in May 1980 and was brutally beaten down by the military government. The democracy movement was not only unprecedented; it became the leading basis for the democratization of South Korean society and the establishment of new forums of civil society.

Widely acknowledged as the spiritual center of the struggle for participatory democracy in South Korea, the city of Gwangju made the first steps toward claiming the political importance of open civil and cultural forums as indicators of a stable democratic sphere by launching the Gwangju Biennale. At the time of its inception in 1995, the exhibition responded directly to the critical impact of the democracy movements of the 1980s. The inaugural exhibition of Gwangju Biennale was presented to over one million visitors. Over the last decade the Gwangju Biennale's critical experiment in the field of contemporary art has had a lasting impact in Asia, not least of which is the attempt by other projects in South Korea and neighboring countries to replicate some of its curatorial ambitions and to emulate its example.

# Gwangju Biennale 2008

札幌市立大学デザイン学部 Maroan el Sani

The importance of the Gwangju Biennale is, at least, twofold: on the one hand, it is one of the key international cultural institutions to emerge from Korea's unique modern, national, and historical experience, and linked to the dynamism of Asia in the 21st century. The significance of using the biennial as a model for historical reflection is further underscored when one considers Korea's postcolonial status. At the same time, the Gwangju Biennale has evolved into one of the few pioneering international exhibitions to engage in the task of analyzing the impact of globalization on the field of contemporary art, and to challenge an older system of international exhibitions based on the outmoded system of national pavilions. In so doing, Gwangju Biennale has provided the space in which to explore the changing nature of international artistic networks, and to examine new modes of artistic subjectivity and conditions of contemporary cultural production that extend beyond national borders or focus on regional modes of identification. Another important point to underscore is the situation of the Biennale as an independent institution. Yet as part of the cultural initiatives of the city of Gwangju, it is simultaneously linked with the network of the global exhibition system and situated at the geopolitical nexus of the cultural policies of the state. These links have allowed the institution to constantly rethink its biennial exhibitions around experimental praxis and innovative curatorial ideas.

In providing such a reflexive site for the critical interrogation of the vicissitudes of contemporary art, the Gwangju Biennale has today assumed a dialectical position in debates focused on the task of reorienting the axis of cultural and institutional networks of contemporary art. The Gwangju Biennale deliberately positions itself as a resolutely global, open-ended exhibition model dedicated to serving as a discursive site for critical works of contemporary art and providing innovative curatorial interfaces for artistic and cultural production. Therefore, a remarkable legacy of its accomplishments is borne out by the fact that it has enlarged its critical mandate while remaining fundamentally an institution based in an artistically underdeveloped region of South Korea. The biennial has therefore continuously fashioned itself as a force in the critical disruption of networks of cultural authority centered in the metropolis.

In 2008, the Gwangju Biennale continue its tradition of rigorous globalism. The biennale is designed around three components. The first part, On the Road is like a report on recent exhibitions that have occurred or exhibited elsewhere between 2007-2008. The second component of the exhibition structure, Position Papers, is a platform dedicated to the curatorial proposals and experiments in exhibition making by emerging curators. The third element, Insertions, is a limited series of new projects commissioned specifically for the biennale.

The principal exhibition logic of 7th Gwangju Biennale has no thematic framework. Instead, it is comprised of a series of selected traveling exhibitions invited to use the biennale as a destination, a stop on the touring itinerary in the global exhibition network. By inviting exhibitions to the biennale, the aim is not simply to make an exhibition about exhibitions or to debate the principles of curatorial

culture. Rather, exhibitions are understood here as fundamental expressions of cultural and intellectual practice, and as such have gone beyond being understood as a form of reflection or forum of debate for art. Exhibition practices, whether centered in museums or commercial galleries, are meeting points for multiple, polymorphic, and diverse publics. In addition, exhibitions have acquired their own unique language and codes of transmission and translation of works of contemporary art, adding to the developing polyglot nature of global cultural discourses. Thus, the principal intention of the 7th Gwangju Biennale is to dedicate a sustained reflection not only on the codes, but, on the discursive relationship between the work of art and its context of presentation, and the environment of display. For the 7th Gwangju Biennale, the exhibition form as such becomes one of the biennale's principal mediums, a way of simultaneously looking backward and forward, as well as taking stock of the complex ecology of contemporary art and culture. This form functions in relation to the variegated expressive and conceptual methodologies of artists inhabiting the exhibition spaces and sites of the biennale. But instead of considering the context of production, the artist's studio as the starting point of invitations to artists, the exhibition will focus intensely on an intermediary space, the space of encounter between artwork and viewer, between experience and artistic concept. This intermediary space is the site of reception: the exhibition system.

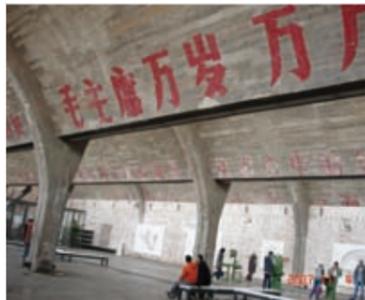
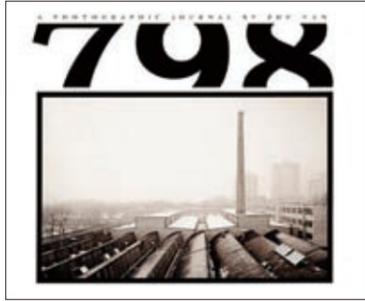
Bringing together a range of activities produced across the span of nearly eighteen months, the exhibition will serve as hosting site, incorporating into its sequence of galleries and sites activities ranging from performances, readings, film screenings, music, dance, theater, to exhibitions initiated within that period of time. From the obscure to the mainstream, from the local to the transnational, these activities can be understood as a chain of traveling cultural worlds and idioms, a network of incommensurable experiments in global culture within the contemporary calendar. Whether originating from a shopping mall, a folk theater, a makeshift display in a neighborhood, alternative gallery systems, non-profit institutions, local cultural centers, or the commercial gallery circuit, art fairs, museums, festivals, and a wide array of exhibition systems and spaces, the biennale's task is to illuminate the intermediary space that governs the mechanisms for the assembly of the multifarious positions of each given work. Using the notion of the space of encounter, the biennale hopes to explore models of cultural exchange, setting up a soft, porous line between context and practice, form and medium, artist and system, institution and locality.

\*Blind Spots - Nina Fischer & Maroan el Sani, Publisher JRP Ringier, 2008



# 路行千里、読書万巻

札幌市立大学デザイン学部 張 浦華



写真・張 浦華

何か不思議な処に迷い込んだような気がして、懐かしさと新鮮さ、そして様々な文化と、芸術ジャンルがここで集合し交錯しています。伝統と前衛、東洋と西洋、多重な影響が重なりあった芸術作品群を目の前にして、衝撃を受けたのは、昨年10月に、北京の798芸術村に行った時でした。“798”という番号は1950年代に中国解放軍が旧ソ連や旧東ドイツの設計した広大な電子部品工場につけられた番号です。798芸術村はこの跡地を2002年ごろからアーティストに貸し出し、アトリエやギャラリーとして再利用されている処です。今は最も注目されている中国現代アートの中心地とされています。798芸術村でシンボルにもなっている建物は、東ドイツの建築家によって建てられたパウハウス建築で、中の壁面には「毛沢東万歳」など、文化大革命時に書かれた巨大スローガンもそのまま残されていたり、巨大な重機や、今でも湯気を出すパイプが所々に見られます。工場の一部が現在でも稼働していて、ギャラリーと境界なく立ち並んでいること自体がアート表現として感じられるのです。

今の中国は激しい変革の時代であり、この時代に誕生した798芸術村は、きっとこのまま定着するのではなく、時代の変革とともに変貌し続けてゆくでしょう。そういう意味で、中国に何が起っているか、どのように変わってゆくのかを自分の目で確かめるには、798芸術村は中国人にとっても、外国人にとっても大変興味深い所だと思います。

798芸術村のアトリエやギャラリーを紹介した本「798: A Photographic Journal By Zhu Yan」があります。ただし、日本では考えられないようなペースで日々次々とオープンしたり、変ったりしているのですが、書物から798芸術村を覗くことができます。情報化された今日では、ドアから出なくても、様々なメディアを通じて、私たちは様々な情報を得ることができます。しかし、書物に書かれた言葉やテレビによる映像は、第三者の目によるものであって、自分の目による

ものではありません。視点が異なれば見えてくるものもおおのずと異なってきます。高等学校の勉強が先生の話聞き取り覚えることに重点が置かれているのに対して、大学の勉強が自ら課題を見つけ自ら解釈をしてそれを検証してゆくものであるということと似ています。

古代中国学者はこういいます。“路行千里、読書万巻”。これは、千里の道を歩こう、万巻の本を読もう。自ら経験することによって自分の見識を高めよう、そして書物の知識（理論知識）によって自分の学問を豊かにさせよう、という意味の言葉です。そしてまた、“路行千里、勝読書万巻”という言い方もあります。自ら経験することは、書物から得る知識より大切であると教えています。

私は旅が好きです。旅することによって沢山の発見ができるからです。日常と異なる視点で、異なる文化に触れて、新たな物差しを手に入れることができます。日本の友人と一緒に、福建省の龍岩土楼（2008年に世界文化遺産に認定）に行く途中で、ある村の小さな店で食事が運ばれてくるのを待っている時のことでした。漆喰で白く塗られたばかりの壁に、人の頭の高さあたりが全室に渡って不自然に黒い線がついていることに気がきました。まさか、と思いながら店の主人にこれは？と尋ねました。そうですよ、この線は洪水の水面の痕です！昨日塗り直したばかりなのですが、もう一回塗らないと痕は消えないね！全財産である家財道具は全て水に浸かってしまいましたよ。それなのに、店の主人が笑いながら洪水が来た時の様子を話してくれました。その時の主人の笑顔は今でも私の記憶の中にくっきりと焼き付けられています。何とおおらかな人々だろう！当時の私は日本のデザイン事務所に勤務していた頃で、毎日が忙しく、神経をすり減らしていた私にとって、その主人のおおらかさに比べて、私の悩みが、なんと小さなことだったのかと思ひ知らされたのです。新たな価値観の物差しを手に入れたような気がしたのです。

筆者紹介  
2006年より札幌市立大学製品デザインコース准教授。1998-2006年筑波大学芸術学系講師。1991-1996年GK。感性情報をデザインプロセスに取り込む研究をおこなう。

# 電子情報活用編 ー文献検索におけるインターネット情報と学術文献データベースの違いー

図書館顧問 田中 道子

筆者紹介  
図書館司書学、図書館情報学、北海道大学学術図書館(室)および附属図書館等で図書館司書として利用者サービス、情報検索、レファレンス業務等に従事。

本年10月に学部学生を対象に実施した図書館アンケートの中で、「課題やレポート作成で参考にする資料や情報の入手をどのようにしていますか？(複数回答可)」との設問がありました。回答者のうち「文献データベースを使う」と「インターネット上の情報の活用する」の項目についてのみ見ると、以下のような結果が得られました。

|        | 文献データベースを使う | インターネット上の情報を活用する |
|--------|-------------|------------------|
| デザイン学部 | 7%          | 68%              |
| 看護学部   | 27%         | 50%              |

この数値をみると、学習・研究上の資料収集手段としてインターネット上の情報の活用比率が高いことが分かります。学部によって数値が異なるのは、研究方法の違いにより生じるものであると思われる。

学術文献に限定して、GoogleやYahoo!などのサーチエンジンを使って検索した場合、何十万件とヒットしてしまい、その中から必要なものを取捨選択するのに困ったことはありませんか？

インターネット上の情報は「玉石混淆」といわれます。紙の世界と違って容易に自分の著作を発表することができます。その際、第三者のチェックが入らないため、信頼性があるものなのかを使い手側で見極めることが求められます。一般的に学術論文は第三者により公表するに値するものかどうかのチェック(査読)制度が設けられています。

公表されている情報が信頼性のあるものかどうかの見極めは、図書であれば目次や奥付を見て著者、タイトル、出版社、出版年等を、雑誌であれば記事の著者、タイトル、掲載雑誌名、出版年等の書誌事項を調べることでその判断がつかます。

インターネット上の情報も利用するときは、図書や雑誌と同じくWebページの著者、題名、URL、Webサイトの名称や運営者、作成・更新時が明記されているかどうかチェックし、信用できる筋の情報であるか見抜くことが大事です。

一方、学術文献データベースは学問分野に特化した情報を収集、整理し、必要

に応じて取り出せるようにしてあるものです。これらを使用することで格段に情報収集の精度が上がります。情報の信用度と言う点からも、提供元が精査された内容の記事や論文を掲載しているので安心して引用することができます。

以下に本学で購入している日本語の学術文献データベースや無料の役立つデータベースを紹介します。

看護学部では、日進月歩で進化する医療現場で最前線の研究情報の入手が求められています。図書は刊行されるまでに時間がかかるため、最新情報は雑誌の記事、論文から得られることが多くあります。看護学文献収集にあたっては、下記の2つのデータベースを検索することから始めていくとよいでしょう。

**医学中央雑誌データベース**は国内の大学・学協会・研究所・病院等が発行している約5,000誌の定期刊行物に掲載されている文献情報が収録(1983年作成データから現在まで)されています。

**メディカル・オンライン**は医療関係者のための医療情報総合Webサイトで、国内の学会・出版社発行の雑誌に掲載された、医学、看護学、医療技術、栄養学等々あらゆる医学関連分野の文献が検索できます。全文が閲覧できるものもあります。

**Nii論文情報ナビゲータCiNii**(サイニーと呼ぶ)は国立情報学研究所が提供しているデータベース・サービスで、全分野の日本の学術論文を中心とした論文情報を収録しています。これには学協会誌・大学研究紀要・国立国会図書館の雑誌記事索引データベースなどが含まれており、収録雑誌18,000誌、収録論文数1,050万論文に及ぶ膨大な日本語の論文が検索できます。そのうち約300万件の論文本文をPDFファイルで見ることができます。

また、検索された論文の引用文献情報(どのような論文を引用しているか、また、どのような論文から引用されているかといった情報)をたどったり、本文を参照したりすることができます。

求める情報によっては学術文献データベースも万能ではありません。新聞記事、

政府機関や自治体等の各種統計情報などは検索の対象外です。これらはWebページに公開されているものもありますので、両方を使い分けて活用されることをお勧めします。また、Google Scholarは、国内文献はもちろん海外文献も含めた学術情報のみを検索してくれるという優れものでもありますので、使ってみてはいかがでしょうか。

最後に情報の形態が紙であろうが、Web上であろうが必要とする情報源をとりだし、知識を習得し、それを評価、分析をおこない、新しい知識の生産につなげていくことが大学の学習・研究で求められています。皆さんの資料収集のサポート役として図書館はお手伝いしていますので、気軽にご相談ください。

※学術文献データベースは図書館ホームページから利用できます。



イラスト・メディアデザインコース3年 倉本 祥平

カウンターの内側から・外側から

# DESIGN

デザイン学部からのコメント

旅  
への  
想  
い

芸術の森キャンパス・ライブラリー 司書

岡 歩美

図書館をいつも利用してくださっている市民の方とお話をする  
ことがあります。

ある日、今年の秋頃に外国へ旅行に行くので下調べもかねつ  
つ、地域の歴史を知ってからそこに行くのだという話を聞きました。  
参考になる資料がこの図書館にはたくさんあるからとても嬉しいし、  
どの本から読もうか迷ってしまうと教えてくださいました。利用者の方  
にこんな風に喜んでいただいたり、お役に立てることは大変嬉しく、  
そんな時はこの仕事をしていて本当によかったと改めて思うことが  
できます。

先日、その方が旅行から帰ってこられて、旅行先での思い出話を聞か  
せていただきました。12日間ほどの日程でイタリアへ行かれたそうで、  
印象に残っている場所はどこですかとお聞きすると、ヴェネツィアと  
ポンペイの遺跡だとおっしゃいました。わたしがなぜそこなのかとお  
聞きすると、自分と同じ“人間”が何百年も昔にそこに生きていて、  
そして今、実際に自分がその場所に行って、そこに生きた人々の証を  
確かに感じる事ができたからだとおっしゃっていました。

この方は図書館で塩野七生さんの本（『ローマ人の物語〈全15巻〉』/  
新潮社/1992-2006）を読んだことが、今回の旅行へ行く最大のきっ  
かけになったそうです。この本と出会ったこと、そして現地へ行って  
からの様々な体験を通じ、自分自身を客観的に見つめることができた  
とおっしゃっていました。また、人生を無駄にしてはいけないと改めて  
実感することができたそうです。

わたし自身が実際に旅行に行っていないくても、こうして市民の方や  
学生さんからお話を聞かせていただけること、そして図書館の本を読  
んだりすることで、様々な場所に行ったような気分になれることも、  
図書館で働く魅力のひとつなのかもしれません。

HejiiCapellaii

デザイン学部製品デザインコース3年

牛田 美穂

たくさんの緑と花と、空にはツバメがたくさん飛び、たくさんの笑顔  
のあるジブリの世界のような所で、楽しい2週間を過ごしてきました。

私が行ってきたところは、スウェーデンのエーランド島にあるカペラ  
ゴーデンという小さな学校です。本科の学生が卒業し新しい入学生が  
来るまでの間に開催される、2週間のサマーコースに参加してきまし  
た。木工、陶芸、染色、家具修理の4つのコースがあり、それぞれ10  
～15名参加者がいて約60人で生活をします。私は木工コースに参  
加しました。朝は7時半にごはんを食べて、その後朝会があり、この  
時間はカールマルムステンのビデオを見たりガーデンの説明を聞いたり  
します。昼ご飯は12時、夜ごはんは4時半。ティータイムは10時と  
3時。それ以外の時間は制作をしました。制作はどこでしていてもOK  
で、私はウォールナットの木の下が大好きで制作や昼寝をしていま  
した。

課題は、まず描いてきたスケッチをもとにそれぞれプレゼンテーショ  
ンとディスカッションをします。このあと制作に入るかは自分で決め  
ます。課題をやっても良いし、作りたいものがあれば先生に言って制  
作します。一緒のコースのルールおばあちゃんはプレート制作の課題  
で、パンを入れる棚の模型（この模型がすごい精巧）とスケッチを  
作ってプレゼンしましたが、制作していたのは全く別のものでした。  
プレート制作の課題でプレートを制作したのは3人。「課題は出すけ  
ど作りたいものがあれば作りたいよ、だけど課題のスケッチは描いて  
ね。」先生は、各々の作りたいものがどうやったら実現するかアドバ  
イスや手助けをくれ、あとは自分で好きなだけ制作をします。

最後に各コースExhibitionをしました。庭や工房内を上手に使い、素  
敵なExhibitionでした。

国も年齢も性別も様々な人がいて自由な考えに囲まれ、毎日遅くま  
で制作できる楽しい2週間でした。

夢  
への  
第  
一  
歩

看護学部 2年

曾我 あゆみ

私は将来、外国の病院で働きたい。なぜなら自分の職業を通じて、  
外国と日本における看護師の立場の違いを体験してみたかったから  
である。つまり、常に生と死の境界にある現場の中において、チ  
ーム医療の中で看護師の立場がどのように違うのかを勉強したいと思  
ったのだ。

幼少の頃から英語が大好きだった。理解すればするほど興味が増し、  
夢も膨らんでいった。いつか私は、どんな職業に就こうとも、ネイ  
ティブの人と関わって第一線で活躍したい。それが今、正に頂点に達  
しようとしている。私にとって英語とは、これからの職業の友として、  
一緒に旅をする大切な存在になると思う。今、私はその目標に向か  
って始動する準備を始めている。これから始まる自分の目標達成の  
ための旅である。

目で見て、肌で感じ、食の楽しみや、人との出会いを楽しむ旅で  
はない。これからは自分の小さい頃から夢見ていた、異国の場所  
で…これから自分の職業を通して異国の地であらゆる可能性を信  
じて、人生の旅の第一歩をスタートさせようと思っている。

人生は常にハラハラドキドキとした道であり、様々な人と出会い、  
共に歩み、共に泣き笑い、悩み考え、そして納得の行く道を試行  
錯誤しながら歩いている。英語は今の自分の目標達成のためには  
必須である。

看護師という職業は患者様の目線に立った医療という媒体を通じて  
共に歩くための

医療チーム一員であり、医師ではできないこと、薬剤師ではでき  
ないこと、技師やリハではできないこと、そして日本と異国の看護  
師のとらえ方の違いを学びたい。

それが私の第一歩…旅と称した未知なる世界への第一歩を踏み出  
したいと考えている。

# NURSING

看護学部からのコメント

あ  
な  
た  
の  
旅  
は  
？

桑園キャンパス・ライブラリー 司書

油谷 彩未

友人の薦めでパリに行きました。彼女から聞いていたパリは、スパが  
あって、食べ物がおいしくて、マリンスポーツや買い物の楽しめる  
ところ。ガイドブックを見ても、パリはリゾート地というイメージが  
強いと思います。けれど、実際行ってみて感じたのは貧困。

リゾートを楽しんでいるのは世界各国から訪れた観光客で、現地で暮  
らす人々の生活は決して豊かとはいえないものでした。小さな屋台や  
露店が立ち並び、それぞれの店の前には子供たちが座って店番をし  
ています。農村に行っても、いたるところに働き盛りの若者が座って  
いるのです。ガイドに、「彼らは何をしているの?」と聞くと、「皆、  
仕事がないからのんびりしている。」とのこと。本当によく、座っ  
てお茶をしている姿を見かけました。

そんな彼らから見たわたしたちは、お金持ちの国の人。皆、口々に  
日本に行ってみたいと言います。でも、絶対に行けないのだと。パ  
リは海がきれいで星がたくさんある島。そして、人々がとてもあたた  
かい。家族や、村のつながりをとても大切にしています。日本だと  
隣に住んでいる人の顔を知らなかったり、なかなか実家に帰るこ  
とも少なかったりしますよね。時間に追われて、ストレス病といわれ  
るものが増えていたり。それで結局自然の中に癒しを求めたりする。  
本当の豊かさって、何だろうと考えさせられました。1度外側から見て  
みることで気付くことがたくさんあります。癒しの樂園パリ島で、  
こんなことを感じるなんて思ってもみませんでした。大切なことは、  
自分の目で見たり、体で感じてみないとわからないもの。そして、  
異なる国の空気やカルチャーを感じることでもっと自分を知ることが  
できたりします。

芸術の森

館外貸出ランキング

NO.1

チーム・パチスタの栄光  
海堂尊著

芸術の森・2F開架 913.6/Kai



©宝島社

|   |   |   |
|---|---|---|
| NO.2<br>夜は短し歩けよ乙女<br>森見登美彦著<br>芸術の森・2F開架 913.6/Mor        | NO.3<br>容疑者Xの献身<br>東野圭吾著<br>芸術の森・2F開架 913.6/Hig           | NO.4<br>探偵ガリレオ<br>東野圭吾著(文春文庫; [U-13-2])<br>芸術の森・1F文庫・新書 913.6/Hig |
| NO.5<br>図書館戦争<br>有川浩著; 徒花スクモイラスト<br>芸術の森・2F開架 913.6/Ari/1 | NO.6<br>ブラックペアン1988<br>海堂尊著<br>芸術の森・2F開架 913.6/Kai        | NO.7<br>きみはポラリス<br>三浦しをん著<br>芸術の森・2F開架 913.6/Miu                  |
| NO.8<br>ジェネラル・ルージュの凱旋<br>海堂尊著<br>芸術の森・2F開架 913.6/Kai      | NO.9<br>図書館内乱<br>有川浩著; 徒花スクモイラスト<br>芸術の森・2F開架 913.6/Ari/2 | NO.10<br>死神の精度<br>伊坂幸太郎著<br>芸術の森・2F開架 913.6/Isa                   |

総評

今回も文学がトップ10を占めています。チーム東城大学付属病院、帝都大学湯川准教授、図書特殊部隊(ライブラリー・タスクフォース)はメディアミクス効果で圧倒的な強さがあります。ランクインを逃したシリーズ作品も僅差でした。これら強豪を押しよけて、堂々2回連続ランクインの『夜は短し〜』、短編集『きみはポラリス』、『死神の精度』は異なった作風で精彩を放っています。(芸術の森キャンパス・ライブラリー司書 中川むつ子)

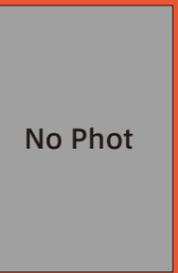
芸術の森

館内貸出ランキング  
視聴覚

NO.1

Dreamgirls  
writtne for the screen  
and  
directed by Bill Condon

芸術の森・1FAV / 778/Dre



|   |  |  |
|---|--|--|
| NO.2<br>時をかける少女<br>細田 守 監督<br>筒井 康隆 原作<br>奥寺佐渡子 脚本<br>芸術の森・1FAV 778.77/Tok  | NO.3<br>ゆれる<br>西川 美和 原案・脚本・監督<br>芸術の森・1FAV 778/Yur                                 | NO.4<br>Happy feet<br>directed by George Miller<br>produced by Doug Mitchell<br>George Miller, Bill Miller<br>芸術の森・1FAV 778.77/Hap |
| NO.5<br>花とアリス<br>hana & alice<br>岩井俊二 監督・脚本・音楽<br>芸術の森・1FAV 778/Han         | NO.6<br>Picnic<br>岩井俊二 監督・脚本<br>芸術の森・1FAV 778/Pic                                  | NO.7<br>Sayuri<br>ロブ・マーシャル監督<br>ロビン・スウィコード脚本<br>アーサー・ゴールデン原作<br>芸術の森・1FAV 778.77/Tim   |
| NO.8<br>チャーリーと<br>チョコレート工場<br>ティム・バートン監督<br>ロアルド・ダール原作<br>芸術の森・1FAV 778/Cha | NO.9<br>ハリー・ポッターと<br>炎のゴブレット<br>マイク・ニューウェル監督<br>J・K・ローリング原作<br>芸術の森・1FAV 778/Har/4 | NO.10<br>誰も知らない<br>是枝裕和 監督・脚本・編集<br>芸術の森・1FAV 778/Dar  |

総評

ハリウッド王道サクセスストーリーが第1位ですが、邦画の健闘が目立ちます。注目は数多く映像化されている『時をかける少女』です。原作・映画・ドラマファンをアッとさせた細田監督の勝利でしょうか。オリジナル脚本の映画が多いのも邦画の特徴のようです。映像美が評判の『Sayuri』は芸術の森ならではのランクインです。現在も『ゆれる』、『花とアリス』は根強い人気があります。(芸術の森キャンパス・ライブラリー司書 中川むつ子)

附属図書館貸出ランキング

貸出日:2007/10/01 ~ 2008/09/30

桑園

館外貸出ランキング

NO.1

New疾患別看護過程の展開  
学研, 1999.

桑園・開架 / 492.914/Yam



学研研究社

|   |  |   |
|---|--|---|
| NO.2<br>The 疾患別病態関連マップ<br>学研研究社, 2001.<br>桑園・開架 492.914/Yam                           | NO.3<br>ナースのための<br>くすりの事典<br>守安洋子著; 1993年版・2007年<br>版(第16版)。--へるす出版, 1993.<br>桑園・開架 499.1/Mor/2007 | NO.4<br>やさしい看護理論:<br>現場で活かせるベースの考え方<br>城ヶ端初子著.<br>(メディカ・マイブックスシリーズ; 1)<br>桑園・開架 492.901/Jog                             |
| NO.5<br>Latest看護技術<br>プラクティス<br>竹尾恵子監修.<br>学研研究社, 2003.<br>桑園・開架 492.911/Lat          | NO.6<br>根拠から学ぶ<br>基礎看護技術<br>江口正信執筆代表.--医学芸術社,<br>2000.--(できるナース・ブック).<br>桑園・開架 492.911/Egu         | NO.7<br>関連図の書き方をマスターしよう:<br>事例を展開しながら学ぶ<br>「本当に役立つ図」を書くためのポイント<br>改訂・増補版.--医学芸術社, 2004.--(NCブックス).<br>桑園・開架 492.913/Kan |
| NO.8<br>消化器系疾患をもつ人への看護<br>大西和子著.--中央法規出版, 1998.<br>--(ナッシングレクチャー).<br>桑園・開架 493.4/Oni | NO.9<br>超入門事例でまなぶ<br>看護理論<br>竹尾恵子監修.--学研, 2000.<br>桑園・開架 492.901/Jir                               | NO.10<br>なぜ?がわかる<br>看護技術LESSON<br>大岡良枝, 大谷真千子編集.<br>--学研研究社, 1999.<br>桑園・開架 492.911/Oka                                 |

総評

またしても桑園らしい看護関連資料のみのトップテンです。看護理論分野が多くランクインしていた前回に比べて、今回は看護技術分野が上位に飛び込んできています。前回のトップ3はどれもランク外になっていること。求められる知識の推移が伺える結果となりました。(桑園キャンパス・ライブラリー司書 油谷彩未)

桑園

館内貸出ランキング  
視聴覚

NO.1

呼吸器のアセスメント; 1, 2.  
ビデオ・バック・ニッポン, 2004.  
(フィジカルアセスメント; 第3-4巻). v.  
桑園・AV / 492.912/Fij/3



|  |  |   |
|--|--|---|
| NO.2<br>呼吸器のアセスメント;<br>1, 2.<br>ビデオ・バック・ニッポン, 2004.<br>(フィジカルアセスメント; 第3-4巻). v.<br>桑園・AV 492.912/Fij/4 | NO.3<br>在宅介護の基礎と実践<br>NHKエデュケーショナル制作; セット, Vol.1.<br>NHKエデュケーショナル, 2007.<br>桑園・AV 369.261/Zai/1  | NO.4<br>循環器のアセスメント<br>ビデオ・バック・ニッポン, 2004.<br>(フィジカルアセスメント; 第5巻). v.<br>桑園・AV 492.912/Fij/5  |
| NO.5<br>感覚機能のアセスメント<br>ビデオ・バック・ニッポン, 2005.<br>(フィジカルアセスメント; 第7巻). v.<br>桑園・AV 492.912/Fij/7            | NO.6<br>分娩第一期の看護技術<br>日本看護協会企画. 日本看護協会, 1998.<br>(看護技術学習支援ビデオシリーズ; .<br>母性看護学; 1. 新しい家族誕生への支援; 1). v.<br>桑園・AV 492.924/Bos/1           | NO.7<br>分娩第二期から第四期までの看護技術<br>日本看護協会企画. 日本看護協会, 1998.<br>(看護技術学習支援ビデオシリーズ; .<br>母性看護学; 2. 新しい家族誕生への支援; 2). v.<br>桑園・AV 492.924/Bos/2     |
| NO.8<br>消化機能のアセスメント<br>ビデオ・バック・ニッポン, 2005.<br>(フィジカルアセスメント; 第6巻). v.巻<br>桑園・AV 492.912/Fij/6           | NO.9<br>HIV エイズってなに?<br>10代のためのエイズ啓発コンテンツ<br>ケース企画制作;<br>1. 感染のしくみ編, 2.HIVと共に生きて編, 3. 社会-Q&A編.<br>ケース, 2006. v.<br>桑園・AV 493.878/HIV/1 | NO.10<br>HIV エイズってなに?<br>10代のためのエイズ啓発コンテンツ<br>ケース企画制作;<br>1. 感染のしくみ編, 2.HIVと共に生きて編, 3. 社会-Q&A編.<br>ケース, 2006. v.<br>桑園・AV 493.878/HIV/2 |

総評

授業で見るように指定されることもあるのでしょうか。1位と2位の「呼吸器のアセスメント」は突出して貸出し回数が多かったです。DVDが増えたこともあり、全体的に前回よりかなり貸出しが増えました。より一層、資料の充実を図りたいです。(桑園キャンパス・ライブラリー司書 油谷 彩未)

OPAC (蔵書検索) で探しても、読みたい図書や雑誌が見つからない…。  
 そんな時には、相互利用 (ILL) サービスを利用してみませんか？

- 相互利用 (ILL) サービスとは…？**  
 本学の図書館に必要な資料が無い場合、他の図書館から図書や雑誌のコピーを取寄せることができるサービスです。図書を借りるサービスを現物貸借 (雑誌は借りられません)、雑誌や図書の一部をコピーで取寄せるサービスを文献複写といます。
- どうやって利用するの？**  
 図書館でマイページを登録し、相互利用申込から必要な情報を入力して申し込みます。  
 入力項目：著者名・論文名・掲載誌 (または図書) のタイトル・発刊年・巻号・掲載ページなど
- マイページってなに？**  
 インターネット上で自分の貸出や予約の状況を確認したり、購入リクエストや相互利用を申し込むことができるサービスです。カウンターに学生証と設定したいパスワードを提示するだけで登録できます。
- 相互利用 (ILL) って無料なの？**  
 有料です。現物貸借は往復分の郵送料、文献複写はコピー代金と郵送料がかかります。詳細についてはカウンターへご相談ください。
- 資料はどのくらいで届くの？**  
 依頼先により異なりますが、1週間から2週間くらいで届きます。  
 \*相互貸借 (ILL) ・マイページは本学の学生・教職員を対象としたサービスです。



芸術の森キャンパス・ライブラリー



桑園キャンパス・ライブラリー

【開放時間】 通常：午前9時～午後9時 / 土曜日：午前10時～午後4時 長期休業期間中：午前9時～午後5時  
 ※日曜・祝日・年末年始は休館。休館日はホームページの開館カレンダーをご覧ください。

読みたい図書・雑誌が図書館に無い…  
 そんな時どうすればいいの？

# 貸し出しランキング★番外編

附属図書館貸出ランキング (桑園) の本編からは漏れてしまいましたが、看護関連以外で貸出の多かった本を紹介します。  
 ★「貸出ランキング番外編」の1～2位は学生からのリクエストによるものです。



**1位**  
**おっぴいの詩 (うた)**  
 21歳の私が、どうして乳がん？  
 大原まゆ著。-- 講談社, 2005  
 所在・請求記号：桑園 開架 916/Oha  
 21歳で乳がんを宣告されるまで、普通の女の子としての日々を送っていた筆者。病気と闘いながらも毎日を前向きに生きる、そんな彼女の姿に勇気が湧きます。



**2位**  
**陰日向に咲く**  
 劇団ひとり著。-- 幻冬舎, 2006  
 所在・請求記号：桑園 開架 913.6/Gek



**3位**  
**ツレがうつになりまして。**  
 細川昭々著。-- 幻冬舎, 2006.  
 所在・請求記号：桑園 開架 916/Hos

## そのほかに人気の高かった本



エスプレッソ&コーヒー  
 桑園 開架 596.7/Koi



おいしい紅茶のレシピ101  
 桑園 開架 596.7/Ois



おひとりさまの老後  
 桑園 開架 367.75/Uen

## 貸出ランキング文庫・新書編

- 1 重カビエロ/伊坂幸太郎著 桑園 文庫・新書コーナー 913.6/Isa
- 2 1ポンドの悲しみ/石田衣良著 桑園 文庫・新書コーナー 913.6/Ish
- 3 人のセックスを笑うな/山崎ナオコ著 桑園 文庫・新書コーナー 913.6/Yam

リクエストをお寄せ下さい

勉強以外の小説や趣味のものでもOKです。(一定の購入基準があり、ご希望に副えない場合もあります。)  
 「こんな本はどうだろう？」というものや質問等ございましたら、どうぞお気軽にカウンターまでお問合せください。お待ちしております。

# 札幌市立大学 附属図書館

SAPPORO CITY UNIVERSITY



<http://www.lib.scu.ac.jp/>

## 編集後記 ▶ デザイン学部 上遠野 敏

海外での先駆的な取り組みに啓示を受ける事がある。ドイツ・エムシャー川流域にあるルール炭田や重工業地帯の産業遺産の活用を見に行った。ルール工業地帯は1970年代から産業の構造転換によって、石炭や製鉄を中心とした重工業が衰退し経済の停滞と共に人口が減少した。荒れ果てたままの空知炭鉱遺産の状況と似ているが大きな違いがある。自然破壊と土壌汚染された負の遺産をエムシャーパーク構想として東西80km、南北10km(居住人口220万人)のエムシャー川流域全体の産業遺産を保存・活用しながら景観公園としている。エッセンやデュイスブルクなどの各地を廻ると自然生態系の再生と共に、場の記憶を検証したランドマーク機能やパノラマビューを創出させ景観公園としての新たな景色を作り出している。産業遺産を改修し新産業施設へと転用して雇用の促進をはかり、美術館や博物館、ホテル、結婚式会場、レストラン、カフェなどに活用している。炭住などの居住空間の再生などと合わせてシステム全体に及ぶ再構築を見る事が出来た。これまでの基幹産業を支えた先人の知恵や技術の集積に敬意を払い、その誇りを尊重しながら歴史を検証して人々が望む最善の方法を模索する。「歴史の無い所に未来はない」の言葉があるように、何が重要なのかの考え方が明快である。経済最優先の日本では面倒な施策を避けリセットすればそれで終わりという考え方がほとんどであろう。外側の目を持つことによって内側のことが見えてくることがある。

## 札幌市立大学附属図書館ニュースレターのほほん第2号

編集 図書運営委員会

編集長 上遠野 敏

編集 張 浦華

神島 滋子

発行日 2008年12月18日

発行 札幌市立大学附属図書館

〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目

事務局 総務課調整担当

TEL.011-592-2346

制作・印刷 株式会社 プリプレス・センター